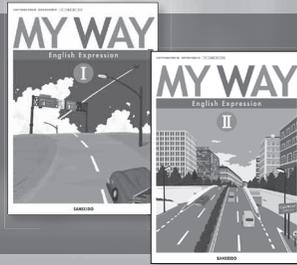


特集2 MY WAY English Expression I・II でつける「英語の基礎力」

留学英語プログラムから 英語の基礎力を考える



同志社女子大学 飯田 毅

1. はじめに

一昔前の日本の大学の英語教育は、生徒が高校までに養ってきた英語の力を頼りにしているような時代でした。言い換えれば、大学受験前の英語力が最も高く、大学に入学すると、英語力はだんだん下がっていくという時代でした。しかし、現在はグローバル化と少子化によって、大学の英語教育は大きく変わりつつあります。多くの大学ではかつてないほど学生の英語力を伸ばすために努力しています。英語を媒介にした授業を行う大学が増えてきました。積極的に学生を海外に送り出す大学も増えています。そのような中で、高校の英語教育の役割が変わりつつあります。5割を超える高校生が大学に進学する現在、生徒は英語の基礎として何を習得する必要があるのでしょうか。本論では、私自身が現在取り組んでいる、大学生を海外の大学に留学させる英語プログラムの取り組みから英語の基礎力を考えていきます。また、その基礎力に本教科書である『MY WAY English Expression I・II』がどのように対応しているのかについても述べます。留学というと、英語教育とは別次元の分野であり、一見日本の教室における英語学習とは関連が薄いように思われます。しかし、留学を生徒が高校卒業後にコミュニケーションとして英語を使う一つの場面であると定義すると、高校の英語で何を学ぶべきかというヒントを与えてくれます。

2. 英語圏留学派遣プログラムの実践から

私の所属する学科では、学生が2年次秋学期から3年次春学期まで約1年間英語圏の28の大学に留学することを義務づけています。政府が進めるグローバル事業の活性化とともに、短期及び長期を含めてこのような大学生を海外に留学させる取組が増えて

きました。日本から海外への留学生の数が減ったというマスコミの報道がありますが、それは4年間留学する学生の数が減っているのであり、4週間程度の短期の語学研修を含めるとむしろ増えている傾向にあります。高校でも短期及び長期を含めて、海外に生徒を送り出す学校が増えてきました。このような傾向は、語学留学を含めた留学が大学ではもちろんのこと、高校でも特別なことではなくなってきたことを示唆しています。

では、どのような学生が留学を含めた4年間で最も英語力が伸びるのでしょうか。大学入学前に留学経験のある学生の方が留学には有利だと思われる人もいるでしょうが、実はそうではありません。もちろん大学入学以前に留学経験があり、現在海外の大学院で勉強している卒業生もいます。しかし、高校時代に留学した学生は多くの場合英語を使った日常のコミュニケーションはできますが、学問的な文章やレポートを英語で読み書きすることは苦手な傾向があります。むしろ留学したことはないが、チャレンジ精神が旺盛で、英語以外の教科にも熱心に学習し、英語の文法や語彙力等の基礎を身につけてきた学生の方が4年間で大きく伸びる傾向があることがわかりました。

学生を英語圏に送り出すプログラムの実践と研究を始めて、現在8年目を迎えます。その試みの中で、英語の言語面、情意面、内容面に関わる基礎力が重要であることがわかりました。英語の基礎力とは、上記の3つの面に関する基礎的な力をバランスよく持ち、特に情意面と内容面では、チャレンジする精神を抱き、他の教科も意欲的に学習しようとする態度が重要です。言語面に必要な能力は fluency（流暢さ）と accuracy（正確さ）です。よく高校までの6年間も英語を勉強したのに、英語でコミュニケーションをすることさえできない、という典型的な不

満を聞きます。この不満には自分の失敗を他人の責任に転嫁する態度が見られますが、それを無視して一言で言えば、fluencyを養成してこなかったことが原因です。一方、英語の本が正確に読めない、きちんとした英語で文章が書けない、と言われるのは accuracyを習得できなかったことが原因です。結論から言えば、accuracyを基本にして fluencyを養成することが重要です。言語面の accuracyに関して重要なことは、英語の仕組みを理解することです。英語の仕組みとは、英語の文型、文法事項、語彙力、文と文のつながり、パラグラフの概念を指します。留学と聞くと、すぐに英語で話せることが重要であると思いますが、そうではありません。口頭での技能を伸ばすことは重要ですが、むしろ英語の仕組みがしっかりと身につけていないと、せっかく留学しても日常のコミュニケーションの段階で終わってしまいます。最終的に高度な英語力に到達できません。また、留学中にそのような基礎的な仕組みを学ぶのは非常に効率が悪く、無駄が多いのです。英語で英語の仕組みを理解するのは、ある程度の高いレベルの英語力がないと無理なのです。その理由は認知的に負荷がかかるからです。

しかし、accuracyだけでは不十分です。accuracyに基づいた fluencyを身につけておくことが重要です。1年間の留学から帰って来た学生は、留学に行き初めて英語を話す時は、正確さよりも単語を並べるだけでも日常会話を通じることが体験して来ます。それは、英語を使わざるを得ない状況に置かれるからです。学生は留学によって、生きていくために英語を使わなければならないのです。また、見知らぬ人との対話や文化や生活習慣の違いから生じる様々なトラブルに巻き込まれながら、それを解決する中で、悲喜こもごものやり取りを通して、コミュニケーションの重要性を体得していきます。確かにこの体験は貴重なものです。留学してこそ身につくものです。しかし、別な見方をすれば、留学をしなくても日本の教室内で、ある程度 fluencyを身につけることは可能です。たとえば、教室内で fluencyを重視した taskを実施し、生徒の発言を促すように積極的に働きかければ、生徒はある程度その力を伸ばすことができます。ただ、fluencyは accuracyを前提とします。もちろん、accuracyからではなく、fluencyから入って身につけていく人もいます。し

う。しかし、日本のような主として英語を外国語として学ぶ状況では、accuracyから入る方が能率的で、確実です。

言語面だけでなく、情意面も重要です。情意面とは外国語に対する態度、動機づけ、不安等の学習者の感情面のことを指します。何となく留学したいからという曖昧な動機づけを持っている学生の英語力はあまり伸びません。将来の目標が明確で、何のために留学するかを説明できる学生は1年間の留学でも飛躍的に英語力を伸ばします。また、言葉は情意面と密接な関わりがあります。そのため、先生の一言で学習意欲が高まったり、下がったりします。流暢に英語を話す友人を見て、実際の能力以下に自分の英語能力を卑下する生徒が多いのです。英語を学ぶ意義や動機づけ、そして英語力が伸びていることを実感させるような生徒の情意面に配慮した指導も大切です。

最後に、コミュニケーションをするためには伝達するための内容が必要不可欠です。留学中、学生は親しい友人とコミュニケーションをとる中で、話題や知識である内容を持っていないと話せないことに気づきます。留学中の大学で正規科目を受講する多くの学生は高校時代に学んだ知識がないと、大学の授業についていけないことを実感します。多くの日本人が海外で母国のことを知らないことに気づき、帰国後日本のことを勉強しようとするのは、内容の大切さに気づかず、単におしゃべりができればよいと安易に外国語学習を考えている場合が多いのです。以上、英語の基礎力を留学の実践と研究を参考に言語面、情意面、内容面について考えてきました。次に、それらが本教科書でどのように扱われているのかを考えてみましょう。

3. 『MY WAY English Expression I・II』 で基礎力をどう伸ばすか

上記の3要素の中で、情意面に関しては、教科書での扱いはやや困難です。教科書の題材や例文、その説明、Grammar for Communicationのセクション、効果的な写真の利用等で生徒の英語に対する興味を引き出すことはできますが、やはり実際に教室で教えられている先生の指導には敵いません。生徒一人ひとりを知っているからこそ、生徒のやる気を引き出せるのです。

教科書で扱うことができ、英語の基礎力を養成する際に最も重要なものは言語面です。この教科書では、場面を重視したシラバスや機能・概念重視のシラバスではなく、基本的に文法シラバスで構成されています。その理由はaccuracyを重視するからです。文法シラバスに関しては短所もありますが、日本人学習者にとって体系的に学べるという利点があります。日本語と英語は文法体系が異なる言語であるため、英語の文法の全体像を把握する必要があります。従来の文法教科書の問題は、機械的な説明、そして機械的に練習問題を解くことに終止している点です。本教科書では、Unitという文法事項のまとまりを作り、その中で体系的かつ意味を重視した文型・文法の指導ができるように工夫しました。また、中学から高校への橋渡しに配慮しながら、英語の基礎的な文法、語彙、表現を体系的に学べるようにしています。特に表現する際の論理性にも配慮し、パラグラフ・ライティングについても扱っています。『MY WAY I』では、Write a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、文と文とのつながりを意識させ、Use!で行ってきた1行英作文を3行の最小のパラグラフにすることです。この活動は『MY WAY II』で、本格的なパラグラフ・ライティングにつながります。『MY WAY II』で扱うパラグラフの基本は、「例示・列挙」「分類」「比較・対照」「原因・結果」「分析」です。Learn!でパラグラフの基本を学び、Practice!で練習問題を解きながら、段階を踏んで最終的にパラグラフが書けるように工夫してあります。

一方、fluencyに関しては、毎回の文型・文法事項の基礎的な練習から、それらを使って自己表現できるようにする過程の中で身につけられるようにしました。本教科書ではaccuracyとfluencyが有機的に結びつけられています。両方の力を養うために、本教科書では1つの課に様々な活動が含まれています。毎回のレッスンでは、生徒は写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。全体的にはaccuracy中心の活動ですが、最後のUse!の段階で生徒は目標文法項目を使って英語の文を書き、それを基に発話します。ここで、fluencyを育てます。時には誤りを気にせず、発表させたいものです。Unitの終了時点では、Project Workというコミュニケーション活動を取り入れています。また、『MY

WAY II』の最後には、discussionやdebateの活動があります。これらの活動については、どのようなレベルの生徒でも取り組めるようにできるだけ易しくしました。「私の学校の生徒には無理だ」ではなく、「私の学校の生徒にこそ必要である」という気持ちで取り組んで下さい。目的はaccuracyではありません。一言英語を発することでいいのです。原稿に基づいて話してもよいでしょう。生徒は自らの意見を述べる体験をすることが大切です。このことがfluencyの基礎となります。

内容面に関しては、レッスンごとに様々な題材（トピック）を設定し、生徒の記憶に残りやすく、生徒にとって身近な題材について表現し易いように配慮しました。また、Use!やProject Workでも生徒の身近な題材を取り上げ、自分の意見等を表現し易いように配慮しました。この題材を他の教科や生徒自身の関心を高めるように発展的に指導することも可能です。

4. おわりに

本論では私の実践を通して、英語の基礎力を言語面、情意面、内容面について考えてきました。授業ではaccuracyとfluencyのバランスを保つことがポイントです。全くaccuracyを無視したfluencyの活動も時には必要でしょう。accuracyに配慮しながら、時にはfluencyの要素を取り入れ、生徒の情意面に配慮し、生徒の発想を活かしながら授業を進めたいものです。

